
なんでも部の活動

城崎海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでも部の活動

【Nコード】

N1221D

【作者名】

城崎海

【あらすじ】

日々激闘続きのなんでも部とそれに振り回される一人の男子生徒の物語。短編を見てから、見てください

第一章 プロローグ（前書き）

見えない人は短編を見てからのほうがいいです。

第一章 プロローグ

夏の勢いの良い、日差しに照らされ
軽く伸びをし、いつものように起きる俺

「学校か・・・」

だがいつもと違うのは俺の気持ちだ、若干鬱

今日は学校がある。ここまで聞くと学校がだるいやる気の無いだけの学生っぽい、いつもとは状況が違う…

俺の友人Aに『なんでも部』なるわけの分からない部活に入れられてしまった…

入れられただけならまだいい…なぜかしら変な部に依頼がきてしまったのだ

まあ、嘆いていてもしょうがない…準備するか…

俺はある事情があり一人暮らし中なので朝起こしてくれたり、朝食を作ってくれたりする人はいない。

なので自分でちゃんと朝食を作り準備をして出て行かなければならない。

朝食に関してはよく作らされていたし問題は無いが。

ちなみに今朝の朝食はベーコンエッグパンとコーヒーだ

そろそろ出るか・・・

30分前ぐらいだし余裕を持って行くにはちょうどいい時間帯だ
「行つてきます。」

家には誰もいないが行っておく、もう癖なのかもしれない…

登校中は特に何も無かった。
生徒が友達と談笑しながらや一人寂しくなど、人それぞれだった
もちろん、俺は後者だった。

そしていつものように俺の前にある建物は、俺の通っている高校で
私立風鈴坂高校
公立も行けたが家の近さからも考え、親の承諾も得たのでここに入
った
そして今は二学期の一週間と一日目。

こんな考え事をしていて遅刻しても嫌なので、すぐに教室に向かう
入った教室に時間的に早いのか、あまり人は居なく数名の生徒だけ
だった。
そしていつもの席に着く

「はぁ・・・」
意図せずため息が出る俺はそうとうこの状況に参ってるらしい…言

わずもながなんでも部のことだが。

『ガラガラガラ』

俺が自分の鬱の度合いを確認しているなか新たな生徒が入ってくる。

「おはようございます。」

委員長だ。

すぐに俺に気づいたのか、日本全国共通の挨拶をした

「おはよう、委員長」

俺も挨拶を返す、軽い会釈付きで。

「どうしたんですか桜君？元氣ないように見えますけど」

心配そうな顔をしていたので、なんでもないよとさっきの表情を隠しつつ答える。

委員長は何かあったら言っておさいね、と言って自分の席に戻った
すごくいい子だ

ていうか、なんかどさくさに紛れて俺の名前、口走ってるね

まあ、アクシデントとついでに自己紹介もするか

俺は深山^{ふかやま} 桜^{さくら}、女みたいな名前だが真正正銘の男だ

なんで女みtainな名前が付いたのかと言うと

両親が生まれてくるのは女の子だとなぜか決め付けていたらしく、
女の子の名前しか考えておらず、いまさら考えるのもなあと思って、
この桜という名前が付いた

なんで決め付けているのか、自分の親ながらなんともアホだと思う。
俺はこのせいでかなり心にキズが付いたが、小学校高学年の時なん
て『桜ちゃん』という不本意な呼ばれ方をしていた…

とまあ名前に関しては何れぐらいでいいだろう。

年は16歳の高校一年生だ。
容姿に関しては自分じゃよく分からないが普通だ。 かつこいいなん
て言われもするが多分社交辞令だと思う

さっきの人はこのクラスの委員長で名前は桐原^{きりはら} 遥^{はるか}だ
俺とは中学校も一緒に三年生の時同じクラスになったこともある
中学校も一緒にのに委員長と言うのをオカシイと思う人がいるであ
ろう。

実は委員長はその時も委員長をやらされていて、そして俺と初めて
会話したときも委員長になった後だったので、俺の呼び方も必然的
に委員長となった。

高校に入ってから委員長をやらされてしまっている

まあ、俺としては助かっている。

今さら桐原さんもしくは遥さん、なんて恥ずかしくて呼べない
俺はシャイだとも思ってくれればいい…

委員長の敬語は

俺は一度、敬語やめたらと言ったことがあったが、もう癖なので直
せないそうだ

委員長の容姿は学年でも5本指に入るほどかわいく、お近づきにな
りたい男子はいっぱいいるわけで俺は少し会話しただけでも他の男
子に睨まれてしまっている

お前ら・・・近づきたいなら努力しろよ・・・

それに委員長は俺の過失でなんでも部に入れられてしまった
今でも俺は申し訳ない気持ちでいっぱいだ

そろそろ人が増えてきたな…

「なんでお前ばうーっとしているんだ」

「うおっ！！！」

横から声を掛けられた

考え事をしたので、かなり驚いた

危うく椅子から転げ落ちそうになった

「そんなに驚くことか？」

「人が黄昏するときいきなり声をかけるな」

「ああ！あれは黄昏ていたのか、俺はすっかりアホ面しているだけ
だと思った」

なんで朝っぱらから、こう俺をイライラさせるんだろう・・・いま
さら気にしないが

目の前のコイツは今、俺のことを悩ませているなんでも部創設者に
してこの学校の問題児だ

別に金髪でかつあげなどしているわけじゃない、ただ自分の楽しみ
について追求してしまうのだ。なので様々な問題を引き起こしてい
る。

そして、俺はなぜか巻き込まれてしまう。

暴走を食い止めろと思う人がいるかもしれないが、コイツを止める
などこの世にはいないと思う

あの世ですらいるかどうか…

名前は友人Aではなく曾野崎^{そののちき} 修也^{しゅえ}という

こいつとは幼馴染で元ライバル、多分俺の一方的な思い込みだが

修也には何をしても勝てなかった

修也が空手をやれば、俺も空手をやったし

修也が剣道をやれば、俺も剣道をやった

だがすごい努力をして結構な強さになったつもりでも、やる気ないくせにこいつに勝てなかった

また勉強も然り

なにか、何か一つ修也に勝てるものがあれば振り回されてはいなかったと思う

それでも中一までは必死にがんばっていた、だけど中二からは馬鹿馬鹿しくなり挑みはしなくなった。勝てないと分かっているも挑まなくなったと言うことは少しは大人になったのかもしれない…

「今日のお前変だぞ…」

お前の作った謎の部のせいで考え事が多くなったのかもしれない文句は言わない、無駄だから

のん気に考えていたら修也の口からとんでもない事実が告げられる
「お前、依頼人と会えよ」
なにiiiiiiii

俺もう駄目かしんない

第一章 プロローグ（後書き）

連載希望の方がいたので連載にしてみました。

なんか自分でも無謀なことしたような・・・
もう気にしないで。

よくわからないですが恋愛入れると思います。

見ていただいた人は更新遅いですが、応援してください。よろしく
お願いします。

また出会うことがあれば。

第一章 第一話 副部長

「オイッ！！どういうことだ！！！」

なんでそんな事になったんだよ

「大丈夫だ、俺も行く」

それをどういう風に受け止め、安心すればいいんだ

俺的には不安材料にしか思えないんだが

しかも質問にたいする答えが出ていない

「俺は、なぜその人に俺が会う必要があるのか教えて欲しい」

「フッ、愚問だな…桜が副部長だからに決まっているだろう」

ここで衝撃の事実が判明

「はあ、なんなんだそれ！？」

俺はそんな事初耳なんだが

「ああ、言っていないからな」

オイ、なにをさらつと…

「なんで言わない？」

「お前は言ったところで承諾しないだろう？」

「あたりまえだ、そんなのはバカにやらせときゃいいいだろ」

はつきり言って、そんなことを引き受けるのは本当に勘弁して欲しい。

只でさえコイツの気紛れに被害を受けるのは俺なんだ！

これは未来を予言できるわけでもない一般男性の俺でさえ予測可能な不動の事実である事は間違いないと断言できる。

それを、さらに副部長などというものになれば俺と奴の間に入った依頼人なるひとが困惑してしまうであろう

そこで何も気にしない奴が勝手に話を進め、その中間に入って説明してる俺が容易に頭の中で想像できてしまう。それに…

「それは無理だ」

俺の永遠とも呼べる考えをシャットダウンさせる奴の発言

「バカにやらせると、あいつのトンチンカンな発言が俺のイライラを誘う」

確かに、バカにやらせるといふのは軽率な発言だったと言えるだろう、俺も自分の事となると冷静を欠いているな…

コイツといるとやはり、人間は自分の身が一番大切なんだと身を持って痛感できる、ニートなどにお勧め可能かもしれん。

もちろん、2時間もすれば返却だろうが…

「それでも納得いかん・・・姉さんにやらせるべきだ、部活内でも最年長なんだから」

この中で言えば、断トツ委員長が副…いや部長に向いているだが、彼女のを推薦する気はミジンコほどもない
もしも、俺が副部長になったとしても、彼女は売らない
まあ、守ってやるというには力不足だが…

なにせ、俺の意見は修也の言葉一つで簡単に却下される
修也のことだから、委員長よりも俺を押すだろう

そこで、姉さんの登場だ！

無理でも簡単には諦めつかないのが俺なんだ

「いや、彼女は色々忙しいからな」

そうか盲点だった…

姉さんは生徒会の書記という位置づけがされていたんだ
クソッ

「わかった…俺がやるよ・・・」
「さすがだ！物分かりがいいな」
俺が苦勞を一拳に背負うのか…

『キンコンカンコーン』

話を終えてすぐチャイムが鳴る

「オッ、ちょうどいいな」

俺を納得させることができたことが嬉しいのか、修也は嬉々として自分の席に戻っていった

なんか、うまくアイツの思う壺のような気がするとは思えない

悲しくなるから

「じゃあ、日直」

先生が入ってきて、すぐ指示

そろそろか・・・

「セーーーーーフ」

慌しく入ってくる、バカ

もうチャイムが鳴っているよ、そんなことにも気づかないほどバカなんだろ

ああ、可哀想に

「毎度の事だが完全にアウトだぞ」

「ノーーーーー」

先生からの死の宣告を受けてしまったと言って
トボトボと自分の席に座る

それよりもお前うるさい

それからすぐ出席を取ったりなんだりして、すぐにHR終了
終了とともにココに向かう、あいつ等と委員長

「よう、ようてめえら」

「うるさいバカ!!」

修也と声がぴったり合う

まさか、二人ともに言われると思ってなかったのか、その場に頂垂れるバカ

床には手つくなよ、汚いぞ
それを見て委員長も苦笑い

「で、委員長はどうしたの」

バカは無視して、委員長がココに来るなんて珍しい

いつもは近くの席の人と話をしているからね、委員長人気だし
男女平等に

「桜君が集まって欲しいような顔をしていましたから」

ニコツと笑って

あゝ、これじゃあ、大体の男子は落ちちゃうわ、あまり振りまくも
んじゃないな

俺そんな顔してたか、多分同情を誘うような顔しかしてないだろ…

「んじゃ、まあ近況報告「桜が副部長になった」そうやって、なん
でお前は俺のセリフ取るの？」

「たまたまだ…」

嘘だろ、ニヤけながら言っても説得力無いぞ

「二人とも仲良いんですね！」

「委員長それは誤解だ、長年コイツといればこうもなってしまう」

「論点がずれましたね、それではっ！なぜ桜君が副部長になったんですか？」

「理由なんて無いよ、委員長ほぼコイツの気まぐれ落ちだ」

「大正解だ、さすが幼馴染は違うな」

お前と一週間も行動を共にすれば嫌でもわかるがな

「そろそろ時間なので座りましょう」

さすが委員長だな

「オイッ！！まったあく無視だな」

今のはバカ

めんどくさいんで構ってなかった

バカはそう言ってるが、二人はもう席に戻ってる

「バカ、うるさい、黙ってる」

容赦ないな俺、こんなことで挫けない奴だから気にはしないけど

なんか俺の一言で若干落ち込んだらしい、しぶしぶ戻っていった

そろそろ馬鹿だけでもあんまりなんでそろそろ名前言うか・・・乗り気になれんけどな

あいつはバカもとい高柳連

高校に入ってから知り合った奴で

俺も最初は遠慮がちだったが、もう後々めんどくさくなってあんな対応になった

誰も俺を攻められはしないよ、アイツのウザさを体験してからね
攻められる人がいるならばだけど…

俺と修也はこいつの事をバカと呼んでいる

最初はやめるなどと言っていたがもう諦めたらしい

こんなもんでいつか

「おい、深山教科書出せ」

「あつ、すいません」

もう授業が始まっていたらしい

あんな奴のために内申下げるのは気が引けるな

休み時間だけでも疲れんな、今日は

第一章 第一話 副部長（後書き）

もうなんだかスランプ気味で…
なんか読みにくいかもしれません

それと感想などを頂けるとやる気が出ますお願いします

次から前書きに登場人物紹介したいと思います。

最後にまた出会える日を

第一章 第二話 なんでも部初活動（前書き）

ふかやま
深山 桜 さくら

いつもは冷静、自分のことときは慌てることもある

修也と競っていたため、かなり運動や勉強はできる

修也に関してはいつも振り回されて文句は多いが一緒に居て楽しい
と感じるので縁を切れないでいる。

第一章 第二話 なんでも部初活動

時は流れて昼休み

その前の時間はどうしたのかと言う疑問も浮かぶが特に面白いことが無かったので省かせて頂く

学食にいるところ

うちの学食はカレーやラーメン、餃子など30種類揃っていて、特に食べたいものがないなゝなんて考えている人は、よく学食に来てコレが食べたいと決めるものだ

でも、俺はどちらかと言えば学食じゃなく購買のパン派なので出入りが少ない

その俺がなぜここに来ているのか？

それは依頼人とコンタクト、要は接触を取るために来ている、もちろん修次も

「オイッ、なんで放課後にしないんだ」

「何事も早いほうがいいだろう？」

とまあ、俺は文句たらたらなわけだが…

学校に来てこいつの束縛から離れられるのは、この時間しかないのに…

この時間はゆっくりと人気の無い屋上で、一人で休みたいのだから一応言っておくが俺は孤独の好きな人間ではない

「時と場合によるだろ…」

そこまで急ぐ内容ならまだしも…というか、まったく内容は聞かされていいない

聞きはしたのだが、なんでも「依頼は聞いていないが引き受けはした」

しかもコイツは昨日会っていたそうだし…というかその時内容聞けよ…
「馬鹿だろお前！」と切れてしまいそうになった俺を必死に抑えた俺を誰かに称えて欲しい、寧ろ崇拜に近く

「そんなことは知ったこっちゃ無い」

「なんでお前はいつもそう考えなしに動く？」

「性格だ」

「お前は・・・ハア、もういいよ」

なんか…もうどうしようもない

「すみません」

俺たちが談議を繰り返していた所に、声を掛けられる

そこに居たのは生徒会副会長・・・

「ああ、この人が依頼人だ」

副会長、体系ヒョロヒョロ痩せ型のメガネを掛けた男

顔は普通であるとは言え、選挙のときの演説はユーモアセンスがあり
なかなかの投票者を集め、見事この地位に就いたのである

「どうも、田宮^{たみや} 健司^{けんじ} です。」

「こちらこそ深山 桜です。」

お互いに自己紹介をし、軽く握手を交わす

やっぱり精神年齢がとても高い人なのか、俺の名前を聞いた瞬間吹き出すことも無く、敬語を使い、大人の対応だ

自分の前の席に座ってもらう

「申し訳ないですが、本題に入る前に一つお聞きしてもいいですか？」

どうぞといわれたので言わせてもらう

「なぜ、この部に頼もうと？」

「ハイ、ええーつと深山さん…じゃなくて莉子^{りこ}さんに聞きました」
莉子とは俺の姉

「いつも呼んでいるように呼んでくれて構いません」

呼びにくいと思うので、それに俺に気を使わせるのもなんか悪い

「すいません、深山さんが自分やいるしかっこいい弟さんもいるし、それにそこなら引き受けてくれるだろう」

「ざけんな、なにがかっこいい弟だ！あの姉^{アホ}」

もしもアホがここにいるならば所構わず5時間説教確定だな

そんなことよりも、これで合点が言った。

姉さんからの紹介なら意味不明な部活に来る依頼も理解できる

「そうだったんですか…では本題に」

「はい、真に申し訳ないんですが…」

おーい、焦らさないで下さい

内心ドキドキ物なんですから

「なんですか？」

耐え切れなかった

部長はだんまりを決め込んでいる

これじゃあ、どっちが部長かわからんな

「生徒会の仕事を手伝って下さい」

「えっ!？」

意外とあっさりとした内容だったな

「ダメならいいんですが…」

「全然いいですよ、これを断ってしまうと部活の存在自体が疑問ですから」

「良かったです、今日までなのに全然間に合わなかったんです」
色々大変らしい、心配事だったがとりあえず何ともなさそうだ

その後は三人で食事を取りながら話をした
田宮さんは固い人なのかと思ってたが、意外とそうでもなくジョークなどを言って親しみやすかった。

「いい人だったな」

「俺は前に会ったから人柄は知ってる」

まっそつか・・・

「お前としては不満か？この依頼は」

今回は大人しい感じの依頼なのでコイツ好みではない

「そうでもない」

俺としては皮肉を交えて言っただつもりだったが、その返答はあっけからんとしていた。

「というと？」

「こういう普通なのもたまにはいい」

「へー、お前でもそう考えるときがあんだな」

いつもそれぐらいだと俺は嬉しいがなと言うとフツと鼻で笑われるだけだった

今日は地面から雨が降るな・・・

「所でバカに関してはどうする？」

「余計なところで出てきても邪魔だし伝えないほうがいいな」

「まっそれが妥当か…」
バカには悪いがそうさせてもらおう

放課後、現在俺たちは生徒会室に集まっている

もちろん3人で

教室に戻った時はバカに気づかれないように委員長に伝えるのは苦
劳した

「じゃっ、入るか」

二人とも頷いたので入らせていただく

『トントん』

「どうぞー」

『ガチャ』

「失礼します」

ドアを開けてはいる

「今日はありがとうございました」

広い生徒会室の真ん中に座り挨拶するは生徒会長

「どうも私は生徒会長の工藤 真理です。」

丁寧にも俺らの前に来て、軽く会釈してくれる

生徒会会長

知能・運動・カリスマ性をもった完璧人間で、選挙のときも断トツの一位だった

「深山桜です。」

「桐原遥です。」

「曾野崎修也です…」

俺らも軽く自己紹介

「早速ですいませんがこれをお願いします」
机にドサツと置かれた資料

これは生徒会だけじゃ今日中には終わらんな・・・

『カリカリカリ・・・タン』

「よし終わったな」

コレでノルマ終了

気がつけばいつのまにかすっかり夜も更け8時13分

生徒会の方々はもう少しあるらしい

まあ、こっちは3人がかりだったし、委員長もがんばったので早めに終わった

「それじゃあ俺たちは帰りますね・・・やっぱり手伝いましょうか？」

「いえいえ大丈夫です、後はこっただけで間に合いますので」

やっぱり他人にやらせるのは気が引けるのかもしれない、無理に言うのもな

「じゃあ、お先に失礼します」

「はい、今日は本当に有難うございました」

会長は深々と頭を下げた

「気にしないで下さい」

そういつてその場を後にする

「委員長、修也行くぞー!!」

「はい」

「わかった」

「今日は疲れたな・・・」

「そうですね！」

「委員長元気だな・・・」

「お前が疲れすぎなんだ」

「ハハハ、そうですねっ！桜君！！」

どうやらここまで疲れてんのは俺だけらしい。
今考えると何もやらす帰ったバカが少し憎い

「じゃあな」

「さようなら」

校門前

修也とは方向が違うのでここでお別れ

「ああ、またな」

「行きますかつ」

「はいっ」

あいつを少し見送って

「それにしても楽しそうだな、委員長」

「そうですね・・・？」

俺がそう言ったら、委員長の顔が赤くなる
理由は不明

「時間も時間だし、委員長の事送るからね！」

「ええっ！！」

またも委員長の顔が赤くなる
理由は不明

「わわ悪いですよ」

さすがいい子だね

「そんなこと気にすんなよ、俺に送られんのヤダとか？」
「いえいえいえいえ、それじゃあお願いします。」
「引き受けました。」

委員長と話しながら歩く

委員長は話しやすいしノツてくれたりするのでとても有意義な時間を過ごせた

もっとも楽しい時間は早々に過ぎるものでこの時間は終わりを向かえたが…

それにしても結構な豪邸だな

「じゃあこの辺で」

「はいっ、とても楽しかったです。」
万遍の笑みを見せてくれる

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

俺も笑みで返す

「委員長じゃあね、また明日」

「今日はありがとうございました、また明日！」
さーて帰るとするか

俺は帰るなり、すぐ食事を食べ、ベットで死んだように眠った
本当につかれた

第一章 第二話 なんでも部初活動（後書き）

まあ、第一章はプロローグということで軽めに

一応恋愛要素も入れつつなんですが
うまくできたかな・・・？

感想をお待ちしています。

悲しいんですね、無いと

でも、見ていただけるだけでも結構です。

応援してください！！！（ずうずうしいような・・・）

最後にまた会える日を

第二章 第一話 副部長困惑（前書き）

曽野崎 修也

学園きつての問題児でいつも桜に迷惑を掛けている
顔は整っていてモテる

よく桜と一緒にいるので貴公子二君などと呼ばれたりする

第二章 第一話 副部長困惑

やっと、なんでも部のよく分からないプレッシャーから抜け出せた俺
なげだろ副部長などと普通の人なら誇るべき地位を貰いながら、
まったく嬉しくないと言うのは

まあいい、ネガティブシンキングと言うのは良くない
あれだ、ため息をつくときと幸せが逃げていく理論だ

こんなに俺を根暗な奴に仕立て上げてるのは、なんでも・・・いや
曾野崎修也であろう

そして、その本人は何やら難しい顔をしながら

「面白い人材が欲しいな、まだ足りない」
とうわごとのように呟いている…

俺はその修也の発言を聞きながら

もう被害者は増やしてやんなと思いつつも絶対に修也を止めるこ
とはできないだろうな
なんて考えまたも根暗な奴に逆戻りしている

どうでもいいが考え事なら俺の席の近くでやらないで欲しい…

俺は修也と席が離れている

まあ、コイツとこのクラスになりながら

席は離れると言う、俺にしては珍しくラッキーなこともあった

唯一の救い、そして無心論者の俺でもキリスト教に入ろうかななど
と思う出来事だった

それぐらい俺は感動していたわけだが…

だが、毎時間毎時間休みにここに来るのはどうだ？意味が無いだろう！

そんなことも言えないほど俺は臆病者なんだがな

「とりあえず、もう帰らないか？」

俺は修也に言った

お気づきにはならなかったかも知れないが、時間はすでに放課後

こんなやつ放つといてさっさと帰ればいいのだが、俺の律儀さが仇となったらしい

奴の次の一言に俺は驚愕した

「よしっ、今日はなにか奢ってやろう」

俺の第六感が、『何か不味いことが起きる』と警告サインを出したが…そこは貧乏学生の悲しい性なのだろう

心は否定していても体が頷いてしまった、しかも即答で

奴はそうなるかわかっていたのか「そうか」と満足そうな顔をした後、俺らは修也と行きつけの喫茶店へと足を運んだ…

何もかもが杞憂に終わればと思ったが、どうやらそうはいかないらしい

かくして次の日に俺はその言葉をやり直したい人生行動の上位に食
い込んでくるとは思いもしなかった…

時は次の日、昼休み

「よしっ！部員を増やすぞ」

どこかで聞いたようなフレーズだ

「わかったよ…」

「ものわかりがいいな、気でも狂ったか？」

なぜコイツは人のことを普通に誉められないのだろうか？

別にそんなことのものわりの良さで誉められたか無いが…

「珍しい事もあるし、さっさと行くか」

「ちょっと待て」

すぐにここから出ようとするアイツを止める
どうやら止められるのが予想外でイラついたのか、若干不機嫌顔になった

普段から喜怒哀楽の乏しいコイツとしては珍しい
多分小学生が遠足に行くような感覚なんだろう

「まだ質問をしていない」

「そんなこと歩きながらでもいいだろ」

確かに、思いつかなかった

それからして廊下を歩いているわけだが・・・

大分注目を浴びている

それはなぜか？

まず第一に、実はここ最近で俺らの知名度が格段にアップしたことが理由として上がる

第二、生徒会手伝った事も

第三、前々からのつけがきたのか、俺らの悪い噂が出回った主なものを
出すと『校長かつら疑惑事件』『教室ジャック未遂事件』などだ

これらが悪い方向に傾き、生徒会の仕事は単なる邪魔だった、校長に何らかの脅しをかけて部活を設立した等と言われた。

前者には大いに不満が残るが、後者には文句が付けられないずばり当たっているからな

それとさっきの事件は良くて退学、悪くて逮捕並みの事件なのになぜ俺らはここにいるのか？

疑問の人も多いと思う。それはなぜか？

学校の隠蔽体質と、先生ほとんどが皆修也に弱みを握られているということは握られる弱みがある教師がこの学校に多く存在するらしい

俺は学校の将来が心配になった、ここではどうでもいい話だな

「質問いいか？」

「ああ…」

「まず一つ目、なぜそんなこと考えた？」

「理由なんか無い、ただ急にそう思った。」

お前はそうゆう奴だったな

「二つ目、それは多くの人に迷惑が掛かるか？」

「しらん」

投げやりだな、これから迷惑が掛かる方々に少しは謝罪しろ

「じゃあ最後、当てはあるんだろうな」

前みたいなのはゴメンなんでね

「当たり前だ、もう着いたぞ」

いつのまに、そんなに歩いたんだ？

ああ！俺が考え事してる間か…

目の前にあったのは

『パソコン部』

と書かれた、部室の前でした。

嫌な予感がする・・・

なにも起きないということは無いんだろうな

第二章 第一話 副部長困惑（後書き）

待っててくださった方々に感謝とそして懺悔を

短いです。今日も

すいませんでした

見捨てないで下さい

第二章 第二話 部長の余裕（前書き）

きりはら はるか
桐原 遥

皆に頼られる存在でいて委員長

学級でかわいいと評判、中学では50人切りしたとかしないとか
それと頭がいい

順番でいうと、修也、桜、遥ほど

第二章 第二話 部長の余裕

「それは、お引き受けかねます。」
まあ、そりゃそうでしょうね…

俺の目の前にいる女の子は、今年入った一年生で御堂^{みどう} 凜^{りん}さん
さらに部活動ではパソコン部に所属している。なんでもコンピュー
ターに関してはかなり

まあ、災難な事に見事

問題児、曾野崎 修也に見出されてしまったわけだ

御堂さんには本当に申し訳ないと思っている、俺なわけだが…

でも修也はなぜだろう？ここまでハッキリと断られて起きながら、
今だに笑っている

コイツがしつかりと笑ったり感情を表に出す事はあまり無いので、
俺以外の人が見たら冷笑に見えるだろう

御堂さんも若干怖がっているように見える
まあ、ここも俺の主観が入ってるわけだが…

しかも部員の皆さんもなんか驚いているような、困惑してるような
でも冷静になつてみると俺らナンパしてるみたいだな…

そんな現状報告をしたところで何も変わらないし、会話に参加する
か…

「修也、いきなりそれは無理だつて。」

多分いきなりじゃなくても無理だと思うけど。

「なんかすいません、御堂さん」

「いや、いいです。」

御堂さんはいい人だなっと思った

どっかの誰かさんにも見習わせたい…

くどいようだが、天地がひっくり返っても絶対にありえないけどな

「じゃあ、対決なんてどうですか？」

「対決!？」

「????」

順に修也、俺、御堂さんだ

絶句!なんていうか、いやもう何も言えない…

何の対決?誰がすんの?っていうか何でそこに辿りついたの?

いつもの俺なら、そこまで思いつくだろぅが・・・頭真っ白

修也はしてやったり、って顔だし

一つ言っておくとすれば、意味わかんない

しばらく静寂が包んだ、と言っても1分も無かったが

「対決という、意味が良くわからないですが…」

御堂さんも苦笑いだよね、そりゃそうだぶっ飛びすぎてる・・・

あえて言うなら、講習とか抜かして車のテストを受けるようなものだ。

でも恐いのは、なんとなくコイツなら受かってしまいそうな所だ

「おーい、凜!お弁当忘れていったよ・・・ってこの人たちは?」

「あっ!お姉ちゃん!っこの人たちは・・・」

「俺たちはなんでも部という部活の部員です。俺は曾野崎修也です。」

「

「うええーつと、俺は深山桜です、どうも…」
手を差し出す。

「私は其処の凜の姉で、御堂 涼じやうです。よろしく」

御堂さん・・・ややこしいな、凜さんと涼先輩は姉妹だったのか！

この人も結構な有名人だ

名前はいいな、高校三年生でこの剣道部部長だ！

この人はなぜ有名なのかと言うと

剣道部始まって初めての女性部長という事と、やつぱり容姿だろう
和服を着たらかなり似合うと思われるような和風美人だから、まあ
いやでも注目を集めてしまう。

「今、俺らなんでも部が凜さんを勧誘してるんです。」

修也なんかは絶対説明しそくに無いので俺が説明しておく
でも凜さんは「えっ、凜！」などと小声で言ってる

・・・嫌でしたか、名前で呼ばれるの…

「そこで断られてしまったんです。」

俺はここまでしか話せないの、目で修也に「話せ」と合図

さっきから御堂さん（姉）は黙って聞いている、質問とか無いんです
か？

「そこで勝負しませんか？って言ったんです。」

伝わったな、良かった

「勝負って何なんですか？」

そこですっ！！そこなんですよ！！！！思いつきり賛成票を投じたい
関係ないけど、敬語をやらなくていいと言っておいた。

「あなたは剣道部部长ですよね、だから剣道で対決しませんかと？」
その言葉は御堂さん（姉）に向けて…ってそっちの御堂さんは今回の件に関係ないぞ

「面白いね、やるよ！」

なぜ！？しかも即答！！

断ってください、策略です。

「お願いします…行くぞ！！！！…あつ、ちなみにコイツが戦います。」

俺がやるの？はあ、意味わかんねー

と言いたい所だったが、言うまもなく連れて行かれる、首根っこ掴まれてな

そして俺たちはパソコン部を後にする。

凜視点

「お姉ちゃん、なんでそんな簡単に引き受けるの！？」

「大丈夫負けるわけないし、そんだけ言っただったら結構な実力者なんですよ？なら戦いたいじゃない」

負けるとは、思ってないけど…

「せめて私に相談してよ…」

「まあ、いいじゃない」

うゝん、まっいつか

でもあの余裕が引つかかるんだよね・・・

第二章 第二話 部長の余裕（後書き）

クリスマスが近づいて来ましたね。

クリスマスネタ書くのもいいかな？

書く事は無いと思いますけど…

ええーっと、関係無いですが皆さんクリスマス楽しんで下さい（何様？）

僕は楽しめます、絶対に！

では、また会える日を

第二章 第三話 副部長は情報に疎い（前書き）

たかなぎ
高柳 蓮 れん

バカで女好きでも彼女などいた経験は無し

修也、桜などといっしょにしていると引き立て役などとも言われる
桜と修也にはバカと呼ばれる。

第二章 第三話 副部長は情報に疎い

「どうすりゃいいのよ……」

もうため息しかない

途中までは随分長かったが対決言ったあたりからトントン拍子でうまく

もう修也を責めるのもアホらしい
人権なんてあったもんじゃないな……

たぶん修也の中に憲法やら法律などと言う言葉はないのだろう。

…今更だなそんなこと

なんやかんやで俺が剣道の相手をする事になったらしい

剣道なんて久しくやってないし……バカだろうな

っていうか、自分でやったら勝てんじゃねえの？オレ自信無いぞ・・

・というか頑張る必要があるのか？

ないな……でも真面目にやんなかったらどうにかなる、間違いなく

「なんなんだよ……」

もう一度呟く、
どうにもならない

そんなことわかっているんだがな

「オイオイオイ、ボーイ何やってるんだい？」

バカが来た…無視でいいや、面倒くさい…

「何やってんの？かなー、かなー、かなー、かなー、かなぶべらっつ」

殴ってやった、結構強めに

「飯食ってんだよ、急いで、どうかの修也のせいで今時間帯に急い
アホ

でな！」

しかも屋上で…お前、登場するときは大体空気が読めてないな
尚且つきなり目の前に顔出して来やがって、ちやうどご飯食べて
驚いて口から吐き出すというベタが無かったのが残念だ

「とりあえずゴメン、何企んでんの？修也は？」

バカは俺の目の前に座る

「何で、何か企んでると思う？」

「修也が笑ってたんだよ、だから何かあんのかなー思ってたね。」

修也ってそんな不気味な奴と思われてんのか？

ちなみに修也はアノ後用事があるとか言って、どっか走って行った。

「さあな、アイツの考えていることは俺でもあまり理解できん…」

「何も知らないのか？」

「俺が剣道部部长と剣道対決することになったぐらいだ…」

「マジで！！そりゃすごいことするねー！！何でそうなった？」

そう言われたので、事のあらましを大まかに説明した。

「えっ、美人姉妹と言われている妹さんか…修也…お前最高！！」
なぜか天に向かって、親指を立ててる

・・・アホだ…どうしようもないアホだ…

「彼女達、そんな風に言われてんのか？」

「知らないのはお前たちぐらいなもんだ、有名人だぞ」

そうなのか…まあ、そうゆう事は右から左に受け流してるからな

「それとお前たちも実は有名なんだけどな！！」

「はあ？どうゆうことだ？」

「問題を多く起こしてるのと、二人ともルックスはいいし」

自分ではそんな事一ミリも思わんが…修也のついでか…納得

「ふーん、知らなかったな」

「案外反応薄いのかな」

「自分の事になんて興味示したところで意味が無い」

「うわっ、クール…だからモテんの？俺も言ってみようかな…」

ボソボソと何をつぶやいてんだ…どうでもいいか

立ち上がった

「戻らないのか？」

「戻る、戻る、ちよっと待って」

少し慌てて、立ち上がるバカ

帰ろう…

「対決日決まったぞ」

教室に入って、俺を見た奴の言葉

もつとまともな言葉が欲しいな、俺は

コイツがこうゆう感じに話しかけてきた時にいい思いでは一つも無い
差し詰め悪戯を思い付くところなる特性なんだろ。

「何の対決だ？」

一応な、一応

もしも不良との対決、喧嘩の日だ！なんて言われても後々困るのは俺だけ…不公平と言えればいいのか…

「剣道対決に決まってるだろ！」

「相手の人には？」

「もちろん言ってる」

「変な行動力だけ異様に高いな…」

その無駄な行動力をボランティアなどに使って欲しいと思うのは俺だけだろうか？

「そんなことはどうでもいい、まあ、練習は必要無いな？」

「いるよアホ！お前久しぶりにやんだぞ」

小学三年生頃にやった以来だ

とゆうよりはコイツと同時にやめた

コイツと争っていたし、戦う相手がいないのにやるなんてアホらしい、とかいう変な考え持っていた

「お前なら勝てるさ、俺のライバルだと思ってた相手だ…唯一な」

初耳だ、ライバルでもないと思ってた。

コイツの強さは断トツだったからな

「せっかくだから、打ち上げやらないか」

本来打ち上げは後にやるもんだがな…

意味は大体わかったからツツコミはしないが…

「二人でか？」

「部活メンバーは全部参加してもらうつもりだが」

「そのぐらいの人数になると、お前の家か？」

こいつの家は結構大きいから部活のメンバーだけでも足りないくらいだ

まあ、簡単に言うと修也の家は金持ちだということ

「そうなるな、ちょうどいい事に家に姉しかいない」

「お前！！姉さんいんの？」

「知らなかったのか」

コイツに姉…かなり気になる

こんな感じの人が二人いたら俺は死ぬるな

「姉もいるが構わないか？」

「構わないよ」

そんな事断るほど心の狭い人間じゃないし、俺も若干気になる

「ならお前が誘つといてくれ」

やっぱオチこれね、わかってたよ

打ち上げでまた色んな事があるんだが今の俺はまだ知らない

第二章 第三話 副部長は情報に疎い（後書き）

こっちの更新ゆっくりしようかなと思います。

冬休みですし（あまり関係ない）

やっぱり人気次第なんですよね…

今のところはゆっくりで！

もしも期待してる人がいるなら教えてください、早めます。
いないですよね、でもじっくり頑張ります…

第二章 第四話 なんでも部の宴会1（前書き）

御堂 凛 みどう りん

かわいいと姉妹で評判の妹

告白された回数は手と足の指の本数じゃ、とても足りないとの事
頭が良く、パソコンの腕はかなりすごいらしい

第二章 第四話 なんでも部の宴会1

「相変わらず、でかいな…」

今、あいつの家の前にいるわけだが…

かなり金持ちなんだなっと思うわけで、慣れないというか…

ああちなみになんでも部、部員は全員了承した
もちろん、俺が誘った

アイツは何も手伝わず、今更気にはしないけど…

『ピンポン』

とりあえずチャイムを押す

「おう、来たか」

インターフォンから聞こえる奴の声、いつも通りだ

「とりあえず、ここ開けてくれ」

「ん・・・了解、ちよつと待ってる」

『ガチャッ』

「おうっ、来たか」

来たからお前の家のチャイムを鳴らし、お前と会話していたわけで

…まあいいや

「とりあえず、入れ」

入れてもらった、入ってまた、この家の大きさを実感する

「ちなみに他の人は？」

「まだ来ていない、姉も居るが…呼ぶか？今部屋の掃除でもしてると思うし、いつでも呼べるぞ？」

「いや、いい」

気になる存在ではあるが、会えないなら会わないほうがいいのかもしれない…

こいつの姉であるわけで美人なのだろう

男としては会いたい、やはりコイツの姉であるというイメージは拭えない

「そうか…まあすぐ会えるしな、とりあえずソファーにでも座ってくれ」

すぐ会えるのか！ならいちいち掃除を中断させてまで呼ぶ必要は無いただろうが！

修也は何しにいったのか疑問に思ったが、すぐにジュースをもって来たので疑問は解消された

無駄な説明だったな

コイツは一応客には気を使うのな、新たな一面を発見していただけたと思う

「粗茶だが、悪いな」

「家に居ても変わらん」

なんでこんなに丁寧なのかね、逆に気持ち悪い

「やはり政治家というものは・・・」

「年金のことどうする・・・」

と俺たちが政界の雑談について花咲かせている所、ある足音が聞こえてきた

そして俺たちの前に美人が現れた、無論修也の姉だ

「どうも修也の姉です。深山桜さん」

「あつと…こちらこそ」

修也のお姉さんは修也のような奇想天外な存在じゃなく、どこかお嬢様のような気品あふれる雰囲気醸し出していた

「なんで俺の名前を？」

修也の姉もとい曾野崎 美佐^{みさ}さんと話している

「修也がよく桜さんの事を話しているんです。まるで惚気を聞かさ

れてるかのごとく」

「余計な事を話させる為に桜と会わせたわけじゃないぞ」

これが、今流行のツンデレなのだろうか？俺には理解できんが…それに男にそんなことされてもあまり嬉しくない

二人の仲はなかなか良好らしい

・・・シャレじゃないぞ！

「ハハハ・・・」

俺は反応に困ってしまうわけだが

『ピンポン』

タイミングがいいと言えいいのか、まあ俺としてはちょうどいいわけだが

「俺が出る、桜と美佐は待っててくれ」

美佐さんと二人きりかい？それは場がもたなそうだ、まあちょっとだし大丈夫そうだけど

そして修也は玄関に向かった

「美佐さんは何歳なんですか？」

ベタだな…

「修也の二個上です」

「ということは三年生ですね、どこの高校ですか？」

「姫野高校です」

「本当ですか！？頭がいいんですね！」

姫野高校とは女子高でこの市の名門校のお嬢様学校と言われている、今の高校生の合コンなどの標的とされている。

「そんなこと無いですよ、桜さんも頭がいいんですね？よく修也

から聞かされました。」

「修也には勝った事ありませんが…」

テストはいつも学年二位だ、結構誇りにしている

「すまん、少し玄関で話していた」

「おー、美人だ！」

「初めまして」

「桜く久しぶりー」

今、挨拶したのはなんでも部の俺を抜いた部員四人だ
順に修也、バカ、委員長、俺の姉、なのだが…

「おい、姉さん…初対面の人には先に挨拶すれよ…」
それに俺とは昨日会ってるし、学校で
しかもバカもなかなか失礼な気がする。

「えー、美佐とは初対面じゃないよー、親友だよ、し・ん・ゆ・う」
「そうなんですか？」

質問を美佐さんにする

「はい、そうですよ」

なんでなんだ…なぜ俺が知らなくて、姉こいつが知ってんだ
…特に気にはしないが

「とりあえず、酒でも飲むか？一応祝杯なわけだし」
急だな、修也

それとこれは打ち上げじゃなかったのか？

「まあ、俺は構わんが…」

委員長はそうゆうのに厳しそうだ

ついでに委員長と美佐さんはすでに挨拶を交わしている

「いいですね、飲みたいです。」

これは意外だ、委員長なら「お酒は二十歳になってからですよ」なんて言うと思ったがな

「チューハイでもあんのか？」

バカにしてはいい質問だな

「ああ、一応置いてあるぞ」

「なら俺が料理でも振舞うか？」

「出前は一応頼んであるぞ」

「いいや、作るよ…多分出前だけじゃ足りないだろ？」

俺は一人暮らしもしてたし料理に関してはバッチリだ

「なら私も手伝います」

委員長にも手伝って貰えるならばうれしい限りだ

バカは両手を挙げて喜んでるし

・・・叫び声はやめてもらいたいが。

「桜がね・・・」

「そうなの？」

あの美佐さんと姉さんは仲良く話している、話し手と聞き手にしっかりと分かれていて性格の違いがしっかりと分かるのがすごいと思うな

「とりあえず、材料でも買ってくるよ」

「私も行きます。」

「悪いな委員長」

「了解した、頼むよ」

「頼まれました、じゃっ行こうか委員長」

「ハイッ！！」

なにかいいことでもあったのかというぐらいの委員長の笑み
何がそんなに嬉しいんだ？

・・・まっいいけど

第二章 第四話 なんでも部の宴会1（後書き）

明けましておめでとうございます。

いろいろと用事があつて書けなかつたんです。

そして書きたい衝動に駆られました、楽しかつた…

この小説自分ではかなり気に入つてゐるんですが、人気はイマイチまあ、個人の趣味なのでそこはしょうがないですが…

せっかくなんで楽しんで欲しいんですけどね

どうでもいい話でしたね。

楽しんで頂けてると勝手に解釈しました。

これからどうしようかなと…長く続きそうなんで、適当な所で早めに終わらせて、気が向いた時にまた始めようとか考えたり…

これは独り言です。

感想随時募集中

蛇足かもしれませんが修也やバカが誰かと恋人関係になる事はありません。

最後に今年もよろしくお願いします。

第二章 第五話 なんでも部の宴会2（前書き）

御堂 涼 みどう りょう

美人姉妹の姉

性格は活発なタイプで妹とは正反対

運動神経はかなり高い、剣道は部長をやるほど強い

逆に勉強は結構苦手で凜と一緒に勉強している事が多い

第二章 第五話 なんでも部の宴会2

勢い的な感じで出てみたはいいが、いざ何を作るのか？と考えると困ってしまう。

俺とは逆に委員長は作るものが決まっているのか、やはり楽しそうに材料をどんどん籠に入れていく
うーん、参った

このまま全部委員長に任せようかと思ったが、やはり全てサジは投げられないとか考える
こんな事になると理解しているならば、好みでも聞いておいたんだが俺は未来が見えるわけでも、タンスで眠っているような猫型ロボットがいるわけでもないのどこまでの予測ができなかった。

予測せずとも好みを聞いておくべきだと俺ならツツコム所だが如何せん自分の事なので自己嫌悪でしか完結するしかない
ネガティブ思考な事が最近多いな……

「桜君は何を作るんですか？」

「いや、まだ決まって無いんだが……」

「そうですか」

「委員長は何作るの？」

「えっと、まだ秘密です。」

「じゃあ楽しみにしておくよ」

これはお世辞でもなんでもなく俺の素直な気持ちだ
いや、委員長の料理ならば同じ学年の男子でも泣いて喜ぶ奴は多いと思う

俺も泣いてとまでは言わないがかなり嬉しい、結局俺も健全ないち男子高校生だから、好きというわけではないが……多分

恥ずかしい話ではあるが初恋はまだだ

勘違いしてもらっては困るが俺は女性に興味が無いわけじゃあ無い
ただ修也との対決でそっちの方に気持ちが向かなかったためという
ことをここで断言したいと思う。

変な話だったな、忘れて頂けると幸いだ

「うーん、あつ！これにしよう」

適当に歩き回っていたところ見つけたのはパスタ用の麺だカルボナ
ーラや普通にスパゲティーでもいいし
とりあえず一安心と言ったところか……

「パスタでも作るんですか？」

委員長が俺の入れている材料を見て問いかける

「まあ、そんなのを二つぐらいにしようかなと……」

「私も楽しみにしてます。」

「ご期待に添えるようにがんばります」

「フフフ……」

委員長という飽きないからいいな

特に後、買うものは無いな

「委員長、あと買うもの無いなら帰るけど……大丈夫？」

「はい、大丈夫です。オッケーです。」

意味一緒だけだね。

「なんでアンタらトランプやってんの？」

かくして俺たちは何事も無く帰ってきたわけだ

だがこいつらは何を飲むでも何を食べるでもなくババ抜きをやっていた

「お前らを待つてから何か食べたりのた方がいいだろ？」

「トランプとかじゃなく話でもしてれば良かったんじゃないか？」

「話は皆のほうがいいんですよ、桜さん」

一理あるな、なかなかいい事言いますね、美佐さん

「そうゆうことなんで、君達は料理をじっくり作ってくつさい！僕達はね料理を作り終えるまで仲良くトランプをやってるからねー」「桜の料理楽しみー」

姉さん…… 同意を求めるように言ったバカの発言を軽くスルーしちゃうアンタはすごい！！

固まってるぞ、バカよ……

蓮お前本当に可哀想な奴なんだな

憶えてないかもしれないが『蓮』はバカの名前だ、ここまで可哀想な奴だから憶えてやって欲しい、俺も悲惨すぎてバカの事を名前で呼んでしまったし

蓮よ……お前への同情なんて久しぶりだな……

三十秒だけバカに同情し、委員長とキツチンに向かう

「よし、できたっ」と

まあ、料理風景は割愛させて頂く

「委員長は…もう少しか？」

「はいっ…！」

委員長は中にチーズを入れたハンバーグとイタリアンサラダみたいな物だった

料理をしている段階でおいしそうでつついっついで一度つまみ食いを考えてしまった。

これは楽しみだ、バカに食べせないようにしようかな…？

いやさすがに俺もそこまで鬼畜じゃない…

ちなみに俺は考えていた通りカルボナーラとスパゲティにしていた委員長が感動していた事が結構嬉しかった、そんな恥ずかしい事は心の奥深くに閉まっておいたけど…

「おいちー！！おいちー！！ねえねえ桜おいしいよおいしいよ…！」
「姉さん、ありがたいけど一回で充分だから…」

「委員長おいしいよ、ハンバーグ!!」

「ありがとうございます……」

「バカ、お前もやめろ…委員長苦笑いだろ……」

俺らの作ってたものを皆に提供している所だが…姉さんとバカがめちゃめちゃうるさい!

嬉しい事には嬉しいんだが節度は持って欲しい

「桜、前よりも腕が上がってるな…やはり一人暮らしを始めたおかげか？」

「まっ、多分な……」

修也はあまり人を褒めないタイプの人間だが、俺の料理に関しては褒めている

……でも、やはりこいつが作ったほうがうまい…悔しいが

「桜さんのも遥さんのものおいしいですよ!」

「ありがとうございます。」

普通にうれしいんですけど、しかも委員長とハモった食べ方も上品なんですネ

「盛りあがってきたところだし、お酒を飲みましょーーう
「オーーー」

やっぱ、どっかあんた等だけ盛り上がり方が変だよ

まあ、飲み頃もちょうどいいか

この後この飲み会は山場を迎える
被害を被るのは勿論俺ですよ。

第二章 第五話 なんでも部の宴会2（後書き）

どうも、城崎海です！！

いろいろ言う前に一つと言わず、二つ！！

お酒は二十歳になってから！！

この物語は完全なるフィクションです！！

今はこっちを主にしてます。

桜の姉、よく考えるとかなり可哀想

名前出ていない！！出すタイミングが無い！！

そして私は文章力が弱い

短くまとめますと、僕は情けないと言っ事です。

終わり

感想は常に募集中、誤字脱字・お前の小説ここが駄目だ！！もつと
こうしないと面白くない！！普通につまんないなど、でもOKです。
ええ、面白いでもいいですよ
むしろその方が嬉しい

今はじめて見た人も、前々から見ていただいてる人も応援していた
だけとありがたい、と言っか嬉しいので応援してください！！！！
！！！！

第二章 第六話 なんでも部の宴会3（前書き）

曽野崎 美佐

修也の姉でやはり修也の姉だけあり美人

実は修也よりも完璧な人間で学校でもアイドル的な立ち位置に居る

第二章 第六話 なんでも部の宴会3

「桜くん」

「なんなんだ？コレ…？」

「弟本人に向かって人の姉をコレ扱いとはさすがだな」

「ああ悪いな、だがなこの状況ならばしかたないとは言えないのか？」

「お前の事を気に入ったとでも思ってくれ、ククク……」

笑ってんなよ…

前の会話だけ聞いても理解できないだろうから今の状態を軽く説明したいと思う。

俺の姉とバカと委員長はダウン、単にバカと姉は飲みすぎだもともとテンションが高かったしな、倒れるのも時間の問題だったろう
委員長は酒が弱かったらしい、無理は禁物だ

対して、俺はたいした飲まなかったしな

そもそもあまり強くないから気をつけてるんだ

修也は強いらしくガバガバ飲んでるがまったく酔っていない、いい体質だと思う。

ここからが問題の彼女だ

勿論修也の姉

なぜ問題か？

あの清楚、可憐というような言葉が付いてもいいような彼女が
だから俺は彼女の事がある意味俺は甘く見ていたのかもしれない
甘く見ていたというよりは油断？なのか？

もったいぶらずに話そうと思う。

密着しているんだ物理的に…

分かりやすく言うと抱きつかれてるんだ、しかも頭を撫でられつつ…

しかも俺の呼び方が『桜さん』から『桜くん』に変わっている

そこら辺は良く分からない

そんなに飲んだのか？いや飲んでない

というかそもそもこんなに酒が弱いなんて思わなかった

いや修也に聞けば…いや修也が言えば良かったんじゃないだろうか？
俺は間違えてないだろう？

「修也、なんで何も言わなかった？」

「俺も美佐がこうなるとは…多分お前の事を気にいったんじゃないか？」

「はあ！？何でそうなる？」

確かに楽しく話してはいたが好きになるって感じじゃ無かったと、俺の見解だ

「お前は鈍感キングだからな、いやもしや興味が無いのか？今流行のBLか？だとしたら付き合い方を少し考えさせてもらうが」

「違うっ！…！！」

「冗談だ…ククク…」

なんでお前にからかわれねばならん

ちなみに、美佐さんは剥がすことはできなかったと言っておこつ

剥がせてたらもうとつくのとうに剥がしてる

普通に恥ずかしい、まあ百パーセント嬉しくないのか？と聞かれると「違う」と言う

「恋人にする気は無いか？」

「ハッ！？誰を？」

「美佐に決まってる」

「お前にそんな権限無いだろ」

「もしも付き合ってくれと美佐に言われたら？」

「そんなことは無い！！もしも億に一つあったとしてもこんなパツとしない奴よりいい人が寄って来るだろ」

「男の俺から見てもお前よりいい奴はあまりいないぞ」

「お前は俺の事を超過大評価してるからな」

「お前が過小評価してんだろ…」

呟きは聞こえなかった、聞く気も無いので結構だ

「まあいいけどな、それがお前のいい所かもしれん」

「バカにしてんのか？」

「そんなんじゃないがな…この事、考えといてくれよ」

あの事とは付き合うとかの話だろうが、そんな心配皆無だな
美佐さんの事を考えてない

「桜くん、無視しないでよ」

「はいはい…何ですか？美佐さん？」

さつきから実はうるさかった美佐さんに言われました

「呼んだだけー」

なら無視するなどと言う必要性が無いな

「何とかしてくれよ、修也…」

もう俺にはどうする事もできない

あいつに何か頼むとリスクがとても大きいから嫌だが、しょうがない

「嫌だ」

予想外の返答だった

これを理由に色々とパシらされるかと思った

「正確には無理だ、美佐は意外と力が強くてな、俺なんかの力じゃ外れん」

「マジかよ……」

どうやら俺は美佐さんが正気を取り戻すまで、抱きつかれ、撫でられの羞恥プレイを続けなければいけないらしい

「えへへ」

変だ、美佐さんが

「んっん、あれ…?」

「起きた?委員長?」

「はい、少し頭痛いですけど…」

「少ししたら帰った方がいいよ、俺送るから」

「はい!!」

いい返事だ

「あの、美佐さんは…?」

何でくつついてんのかって話?

「もう気にしないでくれ」

「ククク……」

修也お前黙れ

「はい…」

「委員長調子悪いの？」

「鈍感キング」

横から出てくんな、しかもどうゆう意味だ

「もう送って貰ってもいいですか？」

「いいよ、行こうか」

「私も行きたい」

ていうかアンタイメージガタ落ちだからその話し方やめろ

くつついて離れないので美佐さんも連れて行くことに

「とりあえず委員長も送るけど戻ってくるから」

「了解した、気をつけて行って来い」

「恥ずかしい……」

離れてない、相変わらず

「い、委員長!？」

「私も少し酔いが残ってて…すいません」

委員長も何故か顔を真っ赤にしながら、俺の腕を抱くように掴む
まさに今、両手に花状態

「えーっと酔いが残ってるんなら仕方ないから、もしも醒めたら離れて」

「はい…！」

委員長の家に着いた

「ところで委員長の家こんなに遅くて平気なの？」

もう時間带的には明日が今日になる時間を周っている、委員長の家はそうゆうのに敵しそうだ

「大丈夫です、結構放任主義なんで！」

「そっか、なら安心」

「今日は楽しかったです。また誘ってください」

「こんなのでよければ」

「お願いします、さようなら」

「じゃあ、また」

「さようなら、遥さん」

委員長が家に入っていった

「もう酔い醒めたなら、離れてくださいよ」

「まだなので少しお願いします」

「はあ…分かりました。」

また注目を浴びて帰るのか

第二章 第六話 なんでも部の宴会3（後書き）

宴会も次でラスト本当はこんなに続くはずじゃな買ったんですが色々詰め込むとこんな形に

あと応援ありがとうございます

がんばっちゃいました

それではまた、城崎海でした。

第二章 第七話 なんでも部の宴会4（前書き）

たみや
田宮 健司

地味な脇役だが、生徒会副会長

ビジュアルはそこまでだが話しに定評が在り、その喋りで生徒会副会長の座に着いた
頭もなかなかいい

第二章 第七話 なんでも部の宴会4

「あのー、もう離れてください」

あれから恥ずかしい思いをしながら帰った

他人から見れば完全なるカップル……いや、バカップルだったからな

「・・・はい、わかりました・・・」

なんでそんなに渋々何ですか…？

「フツ…モテるのも辛いな」

「もててねーよ」

どうゆう適当な茶々の入れ方だ

「えっ！！モテないんですか？」

「美佐さん、そこは驚かないで下さい・・・」

なんかへこみます…

「まあ、そんな事はどうでもいい」

どうでもいいのか…俺を暗くさせといて

それに今さら改まって言うことでも有るのか？

「なんだ、あまり聞きたくは無いが」

「それは、酷く信頼が無いな」

「今までの行為を思い出せば納得じゃないのか？」

「そんな変なことをした記憶は無いが。」

お前に会ってから、お前が問題を起こした時、一緒にとばかりを食らった俺に何度も懺悔しろ

「まあいい…で、なんだ？」

「色々と考えた所、お前も剣道久しぶりにやるわけだ不安も有るだろ？」

「考え直してやっぱり俺が戦う、と言うことか？なら了解した」

「まだ話しの途中で早合点するな、少しは人の話を聞いたほうがいいぞ。」

それはそっくりそのままお前に返したい、言った所で糠に釘だろう
そう思ったので、俺の思いは言葉にならなかった

「で話の続きだ、不安があると思ったから一度俺と戦わないか？剣道で」

「そういうことか…残念だ、でもその提案は俺にも得だな…珍しく」
「お前は俺のことなんだと思ってる？」

「この世に生まれた悪魔」

「それはどう受け取ったほうがいい？」

「さあな」

やはりこの大きい家だけに、部屋も広い
ということとでそのスポーツ専門部屋みたいな所に来た
ここで剣道をする、ということだろう

「どう、ここ？」

「すごいな、お前の家はどこかの財閥なのか？」

まあここまで言うとか大袈裟だが、近いものはある

なんと言つか普通に驚いた、曾野崎家恐るべしと言った所か

「くくく……じゃあ始めるか」

「・・・ああ」

最初の笑いがバカにされたみたいで、あまり機嫌良くはならないが…

「二人とも、私のことはあまり気にしないんですね」

美佐さんはほっとかれて少し拗ねてる

「桜の試合を見れるんだからいいだろ…煩いと追い出すぞ」

「……………」

この一発で黙る、俺の見たって面白くないと思うぞ

まあ、拗ねられても困るので黙っておくが…

「ところで何も考えてなかったが防具は2セットあんのか？」

「当たり前だ」

「何で？」

「お前がやりたくなった時にな、いつでも」

「もったいないだろ」

「何も欲しいもの何て無い」

そうゆうもん何だろうか…？

俺には修也の考えることをわかるなんて一生無い事だと思う

防具も着て竹刀も装備し準備万端になった

やはり着てみると昔の感覚を取り戻すというのか、楽しくなってくる
久しぶりに修也とやるというのもその楽しみの一つでもあるのかも
しれない

「どうした？そんなニコニコして」

お前も人のこと言えないがな

「何でも無い」

簡単に言つと、俺らは戦闘民族ということだ

さあ修也最高の戦いにしようぜ…

「ハア…ハア…」

「フウ…」

何でそんな息切れしてないんだよ
超人だから…とかそんなんのか
ふざけんなよ…

「久しぶりにやるとやはり疲れるな」
そんな風には全然見えん

「そう…だな…」
俺は極々一般だな

「すごいですね桜さん、修也相手にそこまで戦う人初めて見ました」
それって結局修也が凄いんじゃないですかね？

「ありがとうございます…」
ついでにタオルも持ってきて頂いて

「じゃあ、とりあえず休んでから帰れ」
「そうさせて…もらうわ…フウ」

少し休んでからあのダウンしてる二人を連れて帰った
帰る間に美佐さんに「メールアドレス教えてください」と言われた
修也から聞けばいいんじゃないか？と思ったが、「修也から聞いて
下さい」と言うのも感じ悪いから普通に教えた
顔赤かったけど酔い後から回って来たんだろっか
「しっかり休んで下さいね、顔赤いから」と言うと益々顔が赤くな
り参った、と言うか俺のせいかな？

帰りも煩い二人を連れて帰るのはなかなか疲れた、俺は早く寝たいよ

修也視点

慌しく帰って行ったな

「惚れたか？桜に？」

「ナツ、ナンデ？」

あれだけわかりやすい反応をしないとでも思ったんだろつか…少し抜けてるな

「まさか美佐が誰かのことを好きになるなんてな…フッ」
また笑ってしまった、悪い癖だ直したいな

「うっ」

当の美佐は俺を睨むように俺を見てる、迫力は皆無だ

「あつ、所で桜さんって本当にモテてないの？」

「いや、俺らの学校は結構アホな学校でな、いくつかファンクラブが存在しているんだ、で桜の靴箱にラブレターなんて物が入っていると…」

「捨てられる」

どうやら予測できたらしい

「しかも朝早くに来てるともなる、ご苦労な事だ」

俺にも同じ現象が起きている、もつとも興味が無いから構わんが

「やっぱりそうか、委員長さんもライバルなの？」

「まあ、反応を見る限りはな」

もちろん委員長には悪いと思ってるが、姉を応援する

桜が親戚ならな……考えるだけで武者震いがする

「後一つ聞きたいことがあるんだが、何で彼女知り合いなんだ？」

彼女Ⅱ深山（姉）

姉弟歴も長いからコレでわかる、もはや、つつかあの仲だ

「ああ、それなら町で偶々会った時に運命なんだって言って振り回されたんだよ……疲れたけど楽しかった、でそれから親友」

世間は狭いと言うのかそれとも彼女だからこそできる荒業なのか
それでも、凄い偶然だ

まあそれにしても明日の剣道

桜に期待、かな

第二章 第七話 なんでも部の宴会4（後書き）

今の所は剣道描写無しで

十話到達したので向こうを少し更新するのしばらくこっちは更新しないと思います、気分ですが…

更新遅れたくせに偉そうなこと言って申し訳ないです。

もう少しで一万アクセスいきそうです

本当にありがたいこんなグダグダ小説なのに

では面白かった人も、面白くなかった人も

また見てください。お願いします!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1221d/>

なんでも部の活動

2011年1月1日15時28分発行